

日本語国際センター 「海外日本語教師研修」について

日本 日本語国際センター専任講師
久保田美子・築島史恵

今回の「教育実践レポート」は、日本語国際センター開設10周年企画として、日本語国際センターの「海外日本語教師研修」について紹介します。



授業風景

1 はじめに

国際交流基金日本語国際センターでは、日本語を母語としない日本語教師を海外から招いて、一年に、7種類10研修を行っている。今回は、この中から「海外日本語教師長期研修（以下、長期研修）」と「海外日本語教師短期研修（以下、短期研修）」について紹介する。日本語国際センターが設立された平成元年度から10年度までに、長期研修には48ヶ国441人、短期研修には68ヶ国1,405人の研修生が参加した。研修の目的は、

- 1) 日本語運用力を向上させること
- 2) 教授法に関する基礎的な知識を身につけ、教授技術を向上させること
- 3) 現在の日本社会との接触を通して日本事情に関する全般的な知識を身につけること

の3点である。研修はすべて日本語だけで行われるので、参加者は全員、日本語能力試験3級以上の日本語運用力

が必要である。長期研修では、日本語教授経験5年未満、年齢35歳以下の若手教師を対象にしており、短期研修では、日本語教授経験2年以上、年齢55歳までの教師を対象にしている。

2 長期研修について

(1) 日本語の授業

まず、プレースメントテストで日本語運用力別にクラス分けを行う。初級後半から中級前半レベルは2クラスあり、四技能統合型の授業を行っている。また中上級レベルでは「読解文章表現」、「文法」、「聴解口頭表現」という授業科目がある。これらの科目は各々3つのレベルに分かれている。

長期研修の日本語授業で特徴的なことに、「自律学習」の時間と「課題研究」がある。「自律学習」では研修生が自分の目標と必要に合わせて自分で勉強することを方針としている。研修生のニーズが高い漢字、語彙、聴解

などは教材が用意されており、それらの教材に取り組んでもよいし、ほかの勉強をしてもかまわない。また「課題研究」では、研修生が自分でテーマを設定し、調べ、考え、レポートにまとめたり、教材にしたりする。講師は必要に応じて指導を行うが、「自律学習」も「課題研究」も研修生自身が自分で学習を計画、実行することが望まれている。

(2) 教授法の授業

教授法の授業では教授法に関する基本的な知識、技術、考え方を学び、模擬授業や教育実習などを通してそれを実際にためす。自分の授業をよく観察、内省し、他の研修生とも意見を交換する。その中で新しい考え方や方法などを学び、教師として成長することを目指している。



教育実習報告会

(3) 日本文化体験プログラム

授業のほかに、研修では研修生に日本を知ってもらうための様々なプログラムを用意してある。例えば、歌舞伎や大相撲を鑑賞したり茶道や生け花を実際に体験してみる。また、小学校を訪問したり、公民館の活動やホームステイに参加したりして、地域の人達とふれあう機会もある。そして桜の季節には、関西への研修旅行を行う。文化体験プログラムは研修生にとって、日本をより深く、広く理解するために欠かせないものとなっている。

(4) 長期研修の成果と今後の課題

長期間の日本滞在と研修によって、研修生は確実に日本語力を伸ばしている。特に日本人と接したり、様々な活動を経験したりして、日本の伝統文化だけでなく、現代の「ふつう」の日本人の生活や考え方をすることもできる。教授法については、新しい知識や技術に加えて、授業を評価する視点を持つようになる。これは帰国後も自己研修をしながら教師として成長し続けるために非常に



小学校訪問

に大切なことである。このように日本語、日本事情、教授法の三点について研修生が得たことは、教師としての大きな自信につながる。また、世界中の若手教師がこの浦和に集まり、9カ月もの間に生活し勉強する中で、研修生同士のすばらしい友情が生まれ、人間としての成長の場ともなっている。このこともまた、自国の学習者の教育へと反映されていくだろう。

今後は様々な国・地域への対応をさらに充実させていくことと、研修生の帰国後のネットワークづくりが課題として残っている。

3 短期研修について

(1) コースの概要

短期研修では、季節によって、研修生を次のように分けている。

1. 春（5月、6月）の研修：

中等教育機関や年少者のための学校の教師

2. 夏（7月、8月）の研修：すべての機関の教師

3. 冬（1月、2月）の研修：

高等教育機関や成人のための学校の教師

この3つの研修は、ほとんど同じカリキュラムで行われている。研修生は、来日してすぐプレースメントテスト（筆記試験と会話試験（OPI））を受け、その結果で2つのコースに分かれる。

Aコース：日本語能力試験3級程度の日本語力を持つ

ていて、日常会話ができる研修生のコース。

日本語の授業が多い。

Bコース：日本語能力試験2級以上の日本語力を持つ

ていて、日常会話だけでなく、複雑な説明

や議論などができる研修生のコース。

教授法の授業が多い。

各コースの科目別時間数(週あたり)

	日本語 にほんご	日本語教授法 にほんごきょうじゆほう	日本事情 にほんじじょう
Aコース	16時間 じかん	3時間 じかん	2時間 じかん
Bコース	12時間 じかん	7時間 じかん	2時間 じかん

(2) 日本語と日本語教授法の授業

短期研修の日本語の授業には、「総合日本語」と「文法」がある。「総合日本語」は、短い研修期間でも、研修生が日本語の四技能を総合的に学んで達成感を感じることができるように、トピックシラバスを採用している。

このシラバスは、「食べ物」「学校・教育」「旅行・交通」など11のトピックで、それぞれ7つのレベルに分かれている。各クラスの授業は、プレースメントテストの結果を見て、このシラバスの中から決めている。できるだけ新鮮な話題や素材を教材にして、日本だからこそできる授業内容を心がけている。

「教授法」の授業は、教授対象者別のクラスで行っている。Aコースは時間が少ないので、講師の説明やデモンストレーション、研修生の簡単な活動紹介を行っている。Bコースでは、日本語力も高いので、いろいろな教室活動について話し合ったり、実際に講師やほかの研修生が模擬授業を行って、意見を交換したりしている。また、Bコースには、文字指導法、音声指導法などの講義の時間もある。今年度から、この短期研修のための教授法のシラバスを整理するプロジェクトが始まっている。

国や地域によって言語教育観や学習観にも大きな違いがあるので、これから調査研究を重ね、この多様性や非母語話者(non-native)教師の特質をシラバスに積極的に生かしていきたい。

(3) 日本事情の授業と日本文化体験プログラム

「日本事情」の授業は、「日本の地理」「日本の年中行事」



ビジターセッション

事」「歌舞伎」などのテーマがある。

また、長期研修と同じように、日本文化体験プログラムがある。短期研修では、このプログラムと「総合日本語」や「日本事情」の授業内容とをできるだけ関連づけるように工夫している。さらに、その中で、センター周辺に住んでいる日本人と交流する機会(ビジターセッション)も作っている。

こうして、短い期間ではあるが、日本という国を文化や言語、社会現象や背景にある考え方などいろいろな面から多角的に知ってもらいたいと考えている。

(4) 短期研修の課題

短期研修に参加する研修生の国籍は多様で、しかも年々、新しい国からの研修生が増えている。それぞれの国で行われている日本語教育の情報をなるべく早く正確につかんで、カリキュラムや授業内容に反映させていくことが、短期研修にとって一番大切なことであろう。また、この研修自体は短いので、各研修生が帰国後も自分で、いろいろな面で伸びていけるためのステップとなるような研修内容を、これからも工夫していきたいと考えている。

海外日本語教師研修に関するレポートや論文:

以下の資料のほか、日本語国際センターの紀要各号に、研修に関わる論文を掲載している。

(1)特集「世界に向けての日本語教育支援」

『日本語学』(明治書院)1995.7

(2)山田正春・嶋津拓「海外における日本語教育の

近年の動向と日本語国際センターの海外日本語教師研修」

『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編 第2号』(国際交流基金日本語国際センター)1995.1

(3)八田直美・築島史恵「非母語話者日本語教師の現状とその研修の課題」

『JALT日本語教育論集』(JALT日本語教育研究部会)1996.11

*「海外日本語教師研修」の申請に関する問い合わせは、日本語国際センター研修事業課までお願いします。